

館林郷土叢書 第三輯

復刊版



群馬地域文化振興会

館林鄉土史談會編

館林鄉土叢書

第三輯

館林圖書館發行

例言

一、此書は館林郷土史談會に於て會員の發表された郷土研究事項を収録したものである。

一、館林郷土史談會は昭和七年十二月第一回例會を開きてより毎月一回會員交互研究事項を發表する事とし今日まで其回数五十五、發表事項六十餘に及んでゐる。依つて同會に依囑し其内十三篇を本書に登載する事にした。其他の事項も機を得て順次公刊したいと考へてゐる。

一、館林町に於ては此有益なる研究を廣く傳へて愛郷心涵養に資せんとの見地から本館附帶事業として刊行する様其經費を議決された。是れ本書の發行を見るに至つた所以である。

一、収録せる各篇は何れも讀切りとなるものであるから種別年代等顧慮する事なく總

て同會に於ける發表の順位に配列したのである。

一、館林郷土史談會は既に郷土叢書第一輯として公園躑躅ヶ岡を、第二輯として生田萬、荒井靜野傳を刊行されたので、本書は其後を追ひ館林郷土叢書第三輯と命名した。

一、本書の編纂を終り未だ印刷にも附せざる内に執筆者の一人たる岩尾貞和氏は逝去された。従つて此書に收めた氏の一篇は圖らずも其絶筆となつた。氏は齡既に八十三を數へ舊藩事情には最も精通された所から常に研究上重要資料を提供されたが今後再び其機を得ざるに至つた事は眞に哀惜の情に堪えない。

一、本書の發行に當り斯道に理解ある町當局並に町議各位と編纂の勞を執られたる館林郷土史談會員の方々に深甚なる感謝の意を表す。

昭和十三年三月

館 林 圖 書 館

目次

揚州石井叢翁について……………	寺島 鍊二 (一一)
會津藩老臣西郷頼母館林藩に幽囚せられたるに就て……………	岩尾 貞和 (一五)
廣濟寺と僧潮音……………	福田 啓作 (一五)
退原木呂子退藏翁の事績一斑……………	近藤 晋二郎 (一四)
我が郷土に於ける肝臓ヂストマの研究……………	高野 貞助 (一六)
館林町大字谷越の今昔……………	小林 清四郎 (一七)
本居大平翁の三五詠歌碑……………	小保方 守治 (一八)
萬延元年岡谷莊三郎の洋行……………	後藤 子之吉 (一九)
館林町五寶寺聖天堂略緣起(元天福寺聖天堂)……………	堀口 孝壽 (二三)

生田萬事蹟補遺……………	寺島 鍊 二 (三五)
戊辰役に於ける館林藩の勤王……………	福田 啓 作 (四)
館林町郊外に於ける石器時代の遺物に就て……………	飯塚多右衛門 (一五)
田山花袋翁に描かれた郷土……………	小保方 守 治 (一六)

館林郷土史談會々則……………	(一八)
同 役員氏名……………	(二〇)

楊州石井蠶翁について

寺 島 鍊 二

上毛及上毛人昭和七年一月號誌上、東京帝國大學史料編纂員森銑三氏は、續三王外記の著者と
して石井蠶を紹介した。三王外記の著者は訊洋子と署名し、それが太宰春臺であることは大方承
認されてゐるが、續三王外記の著者は東武野史若無子と署名しただけで、其の誰人であるかは判明
してゐなかつた。所がこの若無子こそ即ち我が郷土の先賢石井蠶翁であつたことが、頼春水の書
いた師友志によつて明かにされたのであつて、森氏は其の研究の冒頭に之を記し蠶に關する幾多
の資料をあけられた。以下その要点を録し且つ森氏の未だ判明しなかつた墓碑による傳記其の他
について記して見る。

一、小 傳

師友志には次のやうに記されてゐる。

石井蠡。字は子彭條太夫と稱す。江戸の人館林侯に仕ふ。文辭に閑に關東の典故に通ず。私著多し、世に三王外記といふものあり作者を知らず。子彭常に其の謬誤を擧げて以て話柄と爲す。皆聽くべし。後續三王外記を著す。館林侯相に居ること年久し。子彭其の書史たり。故に其の事に熟せる也。後其の本邑に歸り學務を掌る。其存歿を知らず。

と。館林侯は即ち松平右近將監武元たけもとであつて、六代將軍家宣の庶弟で館林に封ぜられた清武の孫に當る。正徳三年に生れ吉宗家重家治の三代に仕へ、延享四年九月よりその歿する安永八年七月まで、三十三年の久しきに亘つて老中の職にあつた名宰相である。此の主^{しゅ}に仕へて右筆となつた蠡は、學才と文辭の妙を具備し、加へて史學典故に造詣が深かつたことは職掌柄幕府の機密にも通じてゐたからであらう。

師友志を書いた頼春水は山陽の父であることは周知のこと、天明三年より寛政五年まで滿十年の間江戸に在つた。蠡と交つたのはこの江戸滯在中であつたと思はれる。

二、その著書

續三王外記とはどんな書物であるか、著者は東武野史若無子とあるのみで序跋も何もなく年代も確實にし難いが、本文は漢文もて記され徳王紀（吉宗）惇王紀（家重）浚王紀（家治）及浚王紀附

録として天明八年六月までの記事がある。此の書の完成したのは多分寛政元年以後同五年まで、春水江戸滞在中であつたと思はる。さればこそ師友志はこれを記して蠡の著としたのだ。續三王外記が三王外記に倣つて將軍家のことを記すに王太王王子などの稱呼を以てしたことが、識者より非難されこれを読む我等にも快からぬものがあるが、此を以て蠡が大義を辨へない學者であると速断するのは甚だ短見と云はなければならぬ。それは本文中随分直筆直言して將軍を難じ施政を批判した点もあるので、著者が曲學阿世習間學者でないことが明かである。後此の書を刊行した甫喜山景雄はかういつて居る。

松浦翁曰く、續記（續三王外記を指す）は古河人士の著、今其姓氏を忘る、全編直筆不忌、當時の秘籍たる知るべし、故に多存せず。

と、憚つて著者名を匿名としたことも肯けるのである。又文辭文体に於ては、支那史書の書き振りに倣つて、天子の下に諸王を配するところから、將軍に王稱を與へたに過ぎないであらう。

三王外記正續篇とも寫本で行はれたが、明治になつて甫喜山氏が我自刊我本の一冊として刊行した。其の附録に「後王制略」をも併せた。これは江戸幕府の制度を簡潔に書いたもので、同じく蠡の著述の一である。此の書には天皇のことを天子と書して明瞭に前書の將軍を王としたのに區別してある。故に前述の如く一概に大義名分に味あじかつたと斷するのは早計ではあるまいか。

以上の外「東都歳時記」なる小著がある。江戸の年中行事を漢文で書いたもので、國書刊行會編の民間風俗年中行事の内に收められてゐる。この書の成立年代も不明である。

三、交 友

蠡が江戸に在りし時、師事兄事した關係も稍々わかるが、當時の有名儒者詩人のうち、頼春水と親しかつたことは前述の師友志に記してあるので、でも知れる。この外に安達清河がある。此の人の編した天明四年刊の詩集「蕪風草」に蠡の詩を載せて「石井蠡字子彭事簡林侯」として、國府臺懷古、題畫、送熊子彦歸奥州の三首がある。その一をあけて見ると、

送熊子彦歸奥州

把酒旗亭日欲曛、蕭々匹馬不堪聞、明朝獨向天涯去、回首關山起白雲。

熊子彦は熊坂定邦で、通稱字右衛門、號臺州、奥州伊達郡高子村の人である。寶曆十年出で、江戸に學び、翌年更に京都に遊んで諸家と交遊したとある。享和三年六十五歳で歿した。蠡との交渉の細かいことはわからぬが、相當の交友關係はあつたことと思はる。

安達清河は下野の人、字は文仲、護國の學統を引く學者で、園老松平武元の知遇を得て世子たちの侍講となつた。寛政四年六十七歳で歿した。大内承裕は唐津侯の儒臣、字は子綽、熊耳と號し、